神戸新聞 夕刊 2026年2月25日

日銀神戸 支店長の視点

別所昌樹氏

オリーブから、インフレの行方を考える

　単身赴任生活の息抜きに料理をします。おいしく作れるように調味料も用意していますが、欠かせないのはオリーブオイルです。お肉を焼くとカリっと仕上がり、塩やレモンと合わせてお刺し身にかければいいワインのアテです。

　日本でオリーブというと小豆島のイメージですが、わが国のオリーブ生産発祥の地は神戸です。明治政府が1885年にいまの山本通に設けた「神戸オリーブ園」に、フランスから持ち帰った苗木が植えられました。周辺の都市化で12年後になくなり、そこから移された木は湊川神社に1本、加古川市の宝蔵寺に2本残されています。

　このオリーブオイル、2年ほど前に2倍近くに値上がりしました。最大の生産国スペインでの干ばつに、ウクライナ紛争で代替財のヒマワリ油の供給が細ったこととユーロ高が加わりました。最近の物価高、原因の多くはこうした食品の供給ショックです。コメが代表ですが、コーヒー、カカオなどの市況も大幅に上がりました。世界的な抹茶ブームで、荒茶の国内企業物価も前年比約5割上がっています。

　もっとも、食品物価上昇の勢いは弱まりつつあります。価格上昇が一巡し、前年比の伸び率は低くなるからです。全国消費者物価指数の生鮮食品を除く前年比は昨年春頃の＋3％台半ばから1月は＋2・0％に下がり、今年前半に＋2％を割る見通しです。その後は、景気改善で人手不足感が強まる中の賃金上昇と相まって前年比＋2％程度の緩やかなインフレになるのがメインシナリオですが、そうなるかは新たな供給ショックの有無、価格設定・消費行動に変化がないかといった点も留意して見極めていきます。